

**図書館員のための
英会話ハンドブックー海外旅行編ー**

京藤松子・澤田恭子・田村俊作・田中梓・ジョンA.
トカーズ著
東京 日本図書館協会発行 1991. 10
185 p 19cm ¥1,500

本書は日本図書館協会が刊行したもので、“図書館員のために”書かれた海外訪問ガイドブックであると「はじめに」に述べられている。本書は、次の四つの章から成り立っている。〔I〕として、「まず、アポイントメントをとる」、〔II〕は、「さあ、現地に到着、さて、どうするか」、〔III〕は、「いよいよ訪問先の図書館で見学の始まりだ」、〔IV〕は、「帰国したら必ず礼状を出そう」。

各章の名称を見てもわかるとおり、たいへん具体的に海外の図書館を訪問する際の方法や手順が説明されている。特に、感心したのは、〔I〕の「まず、アポイントメントをとる」で、先方の図書館への手紙の具体例が書かれている。この手紙の事例を若干変えれば明日にも先方の文書館へ送ることができる点である。また、〔IV〕の「帰国したら必ず礼状を出そう」で、礼状の書き方が書いてありこれも少し直せばそのまま利用できる点である。

本書のメインは、〔III〕にあると思う。訪問先の図書館でどのような質問をするのか。その質問が日本語・英語で書かれている。機関の規模、組織、性格から始まって閲覧等の業務、コンピュータ利用等きめ細かく説明されている。文書館員でも書かれている内容を文書館向きに変えれば活用できる部分も多い。ただし、加えなければならない事項もあると思われる。

ここで、少し気になることを述べてみたい。

確かに、大変きめ細かい質問事例が書かれているので、質問がうまくできるかもしれない。しかし、相手方の回答が聞き取れないことがあると思う。もちろん、英語力の問題かもしれないが、その点をどのように対処するかは考えておいた方がよいと思う。

今後、文書館員も海外の文書館を訪問する機会がふえると思われる。しかし、「言葉の問題」や「訪問の仕方」等が常に頭に付きまとうことが多い。それらの障害を少しでも越えて、お互いに知り合い学び合えれば、こんなに楽しいことはないと思う。このために、本書を上手に活用すれば、われわれにとって「強い味方」になると思う。また、将来“文書館員”のための「海外文書館訪問の手引き」なる「英会話ハンドブック」の刊行を期待したい。

水口 政次・東京都公文書館